初期近代イタリアの幾何学庭園デザインにみられる天空の表象

G.B. フェッラーリ『フローラあるいは花々の栽培』(1638年)の庭園デザイン理論の分析から

REPRESENTATION OF THE HEAVEN IN THE GEOMETRICAL GARDENS OF EARLY MODERN ITALY

An analysis of the theory of garden design in G.B. Ferrari, *Flora ovvero cultura di fiori* (1638)

桑木野 幸司*
Koji KUWAKINO

Giovanni Battista Ferrari (1561-1623) was a Jesuit friar who had an intense interest in the scientific culture of the early seventeenth century Rome. His horticultural book, *Flora ovvero la cultura di fiori* (1638), dedicated to one of the members of the Lincei Academy, strongly reflects this intellectual atmosphere, which was the mixture of the new and the old style of knowledge. Analyzing Ferrari's geometrical flower bed designs from the point of view of astrology and cosmology, this study researches the design principle of the early modern Italian gardens and points out the reflections of contemporary scientific culture that is represented by the Lincei Academy.

Keywords: G. B. Ferrari, *Flora*, geometrical garden, horticulture, Accademia dei Lincei, astrology
G. B. フェッラーリ、『フローラ』、幾何学式庭園、園芸学、リンチェイ・アカデミー、占星術

序. 観念を盛る幾何の器：初期近代精神史としての整形庭園研究

西欧の庭園史研究が、美術・建築史からは独立した一つの学術領域として確立したのは、比較的最近のことである¹。その方法論は、庭園デザインへの様式史的なアプローチか、園内の諸要素に込められたイコノロジー・プログラムの読解が中心であった。しかしながら近年にいたって、様々な人文諸科学からの積極的な参入により、庭園史研究はかつてない視野の広がりを備えるに至っている²。

こうした横断領域型の分析手法がとりわけ威力を発揮するのが、学問の細分化が進んでいなかった初期近代（15-17世紀）を対象とする場合である。美術史家 E. Battisti は16世紀の庭園を「複合的な観念体系」 a complex conceptual system であると定義したが、それらの入り組んだ諸概念のそれぞれを当時のしかるべき知的文脈において読みぬき、庭園という空間に反映された時代特有の観念や思潮を剔抉する「精神史研究」 intellectual history 的な手法が、従来の庭園史研究に豊富な成果をもたらすものと期待できる³。

以上の視点のもとに本稿が分析対象として取り上げるのは、17世紀初頭のローマで活躍したイエズス会士 G. B. フェッラーリ (Giovanni Battista Ferrari, 1561-1623) による園芸書『フローラあるいは花々の栽培』(ローマ 1638年、以下『フローラ』) である⁴。後述するように、当時のローマでは自然科学研究が隆盛し、世界初の

科学アカデミーと称されるリンチェイ・アカデミーが設立されている。こうした知的風土を存分に吸収したフェッラーリが述作した『フローラ』は、17世紀初頭の植物学や園芸学を知るうえでの貴重な資料とされているが、いまだに本格的な研究はなされていない。

同著が庭園史的観点からとりわけ興味深いのが、同時代の植物園とも類似する、幾何学式花壇のデザイン論を含んでいる点である。一般に当時の庭園は精緻な幾何学形態をまとっていたが、その造形原理を明確に文章として規定した事例は少ない⁵。しかしながらフェッラーリは花壇形状を論じる中で、夜空に輝く星々を花に喩え、自身がデザインした庭園を天界の都市の写しである、としている。ここに彼のデザイン原理を読み解く鍵を求められないだろうか。

本稿では、花壇デザインとの関連からフェッラーリが『フローラ』の各所で展開する園芸・植物学の知識を、当時のローマにおける植物学研究との関連から分析し、また都市デザインの系譜とも照らし合わせることで、天空の都市としての幾何学式花壇の造形原理を明らかにすることを目的とする。園芸専門家のフェッラーリが幾何学式花壇に込めていた観念を剔抉することは、おなじく幾何学形状の花壇を備えていた同時代の植物園のデザイン分析にも、有益な示唆となるだろう。以下にはまずフェッラーリの著作を同時代の知的文脈に位置づけ、次いで同書の庭園デザインの分析に移る。

* 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻
大学院生・修士(工学)

Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Univ. of Tokyo,
M. Eng.

1. フェッラーリの園芸論と17世紀初頭ローマの自然科学文化

1.1. バルベリーニ家の学芸庇護とリンチェイ・アカデミーの再評価

近年、美術・科学史の領野において、教皇ウルバヌス八世 (Urbano VIII (Maffeo Barberini) 位: 1623-44) 統治下のローマで隆盛した芸術・自然科学文化に関心が高まっている。教皇ならびに甥の枢機卿フランチェスコ・バルベリーニ (Francesco Barberini) の学芸庇護を中心に、当時のローマでは最先端の自然科学研究と、そこから刺激を受けた芸術文化が華々しく展開した。ローマの丘には、新大陸産の珍花奇葉を大量に栽培した貴族の庭園が次々と造営され、あるいは、イエズス会の宣教師が世界各地から送り届ける人工・自然の産品が、貴紳の間で熱心に蒐集・研究されたという。

こうした知的活況の牽引役を果たしたのが、バルベリーニ枢機卿もメンバーの一員であった、「リンチェイ・アカデミー」Accademia dei Lincei (1603 年結成) である。世界初の科学アカデミーとの評価が高い同組織ではあるが、メンバーのガリレオ (Galileo Galilei, 1564-1642) が唱えた地動説を一丸となって擁護したという事跡を除けば、アカデミー自体の研究業績や各メンバーの活動については、これまでほとんど注目されることがなかった⁶。しかしながら近年、新資料の発見により同アカデミーが当時の芸術・科学文化に果たした甚大な役割が認識されるようになると、とりわけ学頭フェデリコ・チェズィ (Federico Cesi, 1585-1630) を中心とする博物学研究の成果や、アカデミーの重鎮カッシェーノ・ダル・ポッツォ (Cassiano dal Pozzo, 1588-1657) が造営した古代遺物コレクションなどが、大きな注目を集めるようになった⁷。同アカデミーでは植物学研究も盛んに行われており、こうした活動が当時の園芸・造園文化に与えた影響は、今後深く掘り下げてゆくべきテーマである。この点を探る上で興味深い人物が、リンチェイ・アカデミーのメンバーらと親しく交際のあったイエズス会士の園芸家フェッラーリである。

1.2. G. B. フェッラーリとリンチェイ・アカデミーにおける植物研究

シエナ生まれのフェッラーリは、1602 年にローマでイエズス会に入会し、同市の「コレギオ」Collegio Romano で学んだのちは、同学のヘブライ語教授として教鞭を執った (1618-47)。植物学や園芸術に対する興味を早くから涵養し、本稿で分析する園芸書『フローラ』の他にも、柑橘類誌『ヘスペリデース』(ローマ、1646 年) を執筆している⁸。ダル・ポッツォの紹介でバルベリーニ枢機卿の学芸サークルに加わると、同サークルに集うリンチェイ・アカデミーのメンバーらと親しく交わり、最先端の植物学知識を吸収していった。『フローラ』では、ダル・ポッツォが「花々に関する最上の秘密」i bellissimi segreti in material di fiori を惜しみなく提供してくれたことへの謝辞が述べられている⁹。したがって『フローラ』の理解には、リンチェイ・アカデミーによる植物学研究を整理しておく必要があるだろう。

リンチェイ・アカデミーにおける自然研究は、旧来のアリストテレス的自然哲学体系を意図的に脱却し、望遠鏡をはじめ様々な最新器具を駆使した個々の事物の観察データを集積する、といった革新性を備えていた一方で、錬金術、占星術、自然魔術といった旧套の知識の採用、古典権威への盲目的依拠、メンバー間の通信に暗号を使う点など、近代科学とは逆行する側面も有していた¹⁰。

本稿の視点から特に興味深いのが、学頭のチェズィが植物研究を、自然の分類体系学の進展に必須の重要分野と位置づけていた点

である。アカデミーの規範を述べた Linceografo (1605-) では、各種植物を蒐集栽培する植物園が理想的な科学研究施設の一つと位置づけられているのに加え、チェズィ自らも Phytosophicae Tabulae と称する植物分類要覧を 1628 年に編纂している¹¹。新旧の両側面はここにも見られ、まず革新的な側面としては、顕微鏡を駆使して植物の繁殖・生産システムの解明に取り組み、写実的な高質の植物図譜の生産を行った。一方で、当時の最新の植物学が、植物の生態的特性のみを研究する方向を目指したのに対し、リンチェイ・アカデミーではなおも、植物の寓意・神話・エンブレムといった情報に価値を置き、自然魔術的な「表徴理論」を受け入れ、さらにはプリニウスやガレノスといった古典権威の学説を優先させる傾向があった¹²。

リンチェイ・アカデミー史の本格的研究は近年着手されたばかりであり、その科学・美術史上の評価は完全には定まっていなかったが、近代科学に直結する革新性と同時に、近代以前の学知や思考形態が共存していた点を過不足なく評価する必要があるだろう。そうした当時の知の潮流を前提とした上で、以下に、同アカデミーの強い影響下に執筆されたフェッラーリ『フローラ』の内容分析に移る。

2. 『フローラ』の構成と同書における幾何学花壇デザイン

2.1. 『フローラ』の構成

古代ローマの花の女神をタイトルに冠する『フローラ』は、まずラテン語版が 1633 年に出版され、次いで図版を増補したイタリア語版が 1638 年に出来た (本稿ではイタリア語版を用いる)。花卉類の品種特性、栽培法、花の装飾芸術などを論じた、一種の園芸百科全書的な著作であり、リンチェイ会員であったバルベリーニ枢機卿に献呈されている。本書が庭園史に与えた影響は早くから注目されてきたが、原典の精読に基づく本格的研究は未だなされていない¹³。

全体は四書構成で、各書の表題とおおよその内容は以下である。

第一書：庭園の設備器具 (Apparecchio di giardini)

園芸術の崇高性や古代以来の伝統を述べたのち、庭園の敷地条件や花壇デザイン、庭師の特性、園芸器具、土壌改良などを論じる。

第二書：花卉類の識別特徴と差異 (Segnali e differenze di fiori)

様々な園芸品種の分類特徴や栽培特性などを、図版入りで解説。ヨーロッパ原産種から、新大陸や中東産の新品種まで内容は多彩。

第三書：花卉類の植栽と育成 (Del piantare e del nudrire)

具体的な栽培法を論じる。適正な播種期の決定法、害虫駆除法、繁殖のさせ方、各園芸品種別の栽培方法などを詳細に論じる。

第四書：花卉類の利用と驚異 (Uso e maraviglie di fiori)

生け花アート論の他、様々な人工的技術を駆使して、花々の開花時期や色彩、形状、芳香などを自在に変容させる手法を開陳。

本書の記述スタイルは科学と文学の混淆ともいえる独特なもので、リンチェイ・アカデミーによる植物研究を賞賛する言辞が見られるほか (pp. 12-14)、顕微鏡を駆使した科学的記述や精密イラストにまじって、女神フローラを主人公とするフェッラーリ自身の創作寓話や、その情景を描いた図版を挿入している。また花々の驚異に光を当てた第四書では、一種の科学肥料の造成法を、パラケルススの錬金術の三元素 (水銀・塩・硫黄) との類比で説明している他 (pp. 442-43)、自然魔術的な植物変容の手法が様々に語られており、驚異を鍾愛するバロック期の美学、および新旧の知識が混淆する当時の知的潮流から強く影響を受けていることがわかる¹⁴。

2.2. 『フローラ』における幾何学花壇デザイン

庭園のデザインは、第一書・第三章「庭園の建築」Architettura del giardinoにおいて論じられている (pp. 14-44)。以下、フェッラーリが庭園の形状について述べている箇所を、順を追って見てゆこう。

まず、庭園の周囲には柵もしくは生垣をめぐらせ、内部の区画を四角、円、多角形の形状にする (p. 16)。「賢明な建築家」saggio Architetto がデザインするような手法で、入念な分割を施すとよいとされる (p. 20)。もっとも優美な形状は「円形の薔薇型か、鋭い光芒の放射に似た星型」ò rose alla ritondità, ò stelle a gli acuti raggi rassembrano であるとし、庭園を楽園に喩えて次のように述べる。

「これらのエリクション (至福の地) には、まだ、咲き笑う花は植わっていないが、各々に星 (の形状をした花壇) を有しており、(それらの星が) 最も優美なる花々の血統をいずれ生み出すことは明らかだ。遠く離れた天界の光が、その感応力をもってしても作り出せぬ、美しき花の血統を。」¹⁵ ここで花壇が、放射形状および植物育成作用の二点において、星 (天界の光) との類比で語られている点に着目しておきたい。そして栽培に適し、かつ最も優美な花壇とは「八つの角をもち、それらの間に小さな四角形が置かれているもの」quelli di otto angoli con piccoli quadretti fraposti (p. 22)だとし、具体的な図面を掲げて解説を始める。

掲載された図面は全七葉で、それぞれに簡潔な解説を付している。

第一の図面 (図 1) を解説する行文は、以下のとおりである (p. 23)。

「地上の庭園の限定区画内に、天空の都市、あるいは永遠の堅牢を備えた至福の部屋を表象し…、また地上の住処の内に、何れかの手法で天空を馴染ませようと望む者は、厳密な正方形の庭園をモデルとされたし…」¹⁶

第二の図面は上記の長方形版で、好みしだいを選ぶとよい (同)。

第三の図面 (図 2) の解説では、再び天空との類比が語られる (同)。

「もし、庭園の優美さを考慮して円形を選び、もって天空の優美極まりない穹窿と競合せんと欲するか、あるいは花々の境域の内に、新たな世界にも近いものを作り上げようと望む向きは、第三の図を参照されたい。」¹⁷ 示された図面は四角形に円を重ねたもので、前二図面とは異なり、具体的な空間使用の指示もなされている。すなわち、隅部に生じるスペースは園芸器具を収納する小屋か、花々に似合う鳥を飼う禽舎に充て、周壁は低く抑えて花壇に影を落とさないようにする (同)。

第四の図面 (図 3) は、第三の図面の円形花壇部分を八角形にしたもので、この場合、隅部の空きスペースは三角形となる (pp. 23-24)。

第五の図面 (図 4) は、円形劇場をモデルとした楕円形状で、花々の常春を恒久化する。隅部はやはり園芸器具室に当てる (p. 24)。

第六の図面は敷地が不整形の場合の対処法で、可能な限りの区画を整形に造形し、残余部はピラミッドやオベリスク形を象嵌する。

第七の図面は「迷宮」labyrinth 状の構成で、花卉栽培の容易さと困難さをともに表象したい場合に試みるとよい、とされる (p. 24)。

図 1. 第一の図面 (Ferrari, *l'flora*, p. 25)

図 2. 第三の図面 (*Ibid.*, p. 29)

図 3. 第四の図面 (*Ibid.*, p. 31)

図 4. 第五の図面 (*Ibid.*, p. 33)

以上に概観したように、第一から第四までの図面は、いずれも天空をモデルとするものであり、第五図面のデザインもこれらに非常に似ている。対して第六・七図面のデザイン意図はやや例外的といえよう。天空の都市や星との類比、円、八角形、放射形状など、デザインの基本となるモチーフがここには簡潔に語られているが、フェッラーリがこれらの概念にこめた正確な意味を知るには、『フローラ』中の他の箇所で開催される類似テーマにも目を向ける必要があるだろう。以下に、天空と都市の二概念を軸に、検証してみる。

3. 天空の映しとしての幾何学花壇

3.1. 『フローラ』の占星術的園芸理論

『フローラ』中には、花々を星に喩え、あるいは庭園と天空との類比を説く比喩が頻出する。第一書の劈頭、園芸術の崇高性を説く段では、庭園とはあらゆる文化において、「天空の甘美が、おぼろげに影を落とした、粗野なイメージ」adornate e rozze immagini della celeste amenità であると語られる (p. 2)。また園芸の実践的側面においても庭師には「なんらかの星の知識」qualche notizia delle stelleが必要だとされ (p. 46)、第三書において、星の影響力を考慮した播種時期の決定方法が、具体的に紹介される。以下に詳しく見てみよう。

フェッラーリが第三書で詳述しているのは、占星術と園芸術との複合的指示である。すなわち、月とは園芸神「ウェルトゥムヌス」Vertunno に他ならず、その満ち欠けにより土中の水分・熱に変化を生じさせる (p. 224)¹⁸。満月の前後四日間が播種には最適で、新月と月食時は避ける。ついでプリニウス『博物誌』から、月と黄道十二宮の関係について論じた箇所を引き、これらの教訓を現代でも遵守している人々がいる、として、具体的に解説を始める (p. 225)¹⁹。

月が獣帯の特定の宮、すなわち白羊、金牛、処女、天秤、双鱼の各宮に位置する時に、播種を行うとよい。双子宮は敵対的、その他の宮は無影響とされる。これらに、月の満ち欠けを組み合わせ、最良の播種期間を決定しなくてはならない (p. 226)。そしてフェッラーリの意図がもっとも端的に表れているのが、以下に引く行文だ。「花を植えずなくてはならぬ者は、どなたか君侯の若君が誕生した際には守らねばならぬがごとくに、ホロスコープや、あるいは上昇点をより正確に見つけることを意にかけ、幸運が得られるべく努めなくてはならない。」²⁰

すなわち占星術的観点から星の感応力を見極め、植物に最も好ましい時点を選んで園芸作業を行う、という宣言だ。続いて月以外の諸惑星が植物に及ぼす影響が説明される (pp. 227-229)。火星は最大の悪影響をもたらす一方で、木星と金星は好影響を、土星は好・悪の両影響をもたらす。さらに、月が十二宮内の何度の位置にあると

き植物の成長を促進し、または妨害するのが、具体的な数値で示される。ただし一部の占星術師たちが「人間の自由意志を星々に従わせようとする」*voler soggettare il voler libero dell'huomo alle stelle*のは誤りである、と過度の占星術信仰への警句も同時に発している。

ヨーロッパの伝統的世界観によれば、全ての自然物の中には、天界の物質たる第五元素に比類する精髓、すなわち「第五精髓」*quinta essentia* と呼ばれる天界の痕跡が含まれており、これが地上界と天界を結ぶ絆とされた。ルネサンス期にはこの考え方が植物学にも深く浸透し、パラケルスス (A. T. Paracelsus, 1493-1541) や、後には N. カルベッパ (1616-1654) らが、ある特定の植物が、太陽、月、諸惑星、あるいは横道十二星座のいずれかの支配下にあるとする理論体系を整備した²¹。また占星術に関していえば、リンチェイ・アカデミーの創立日がホロスコープによって判断されたように、当時の自然科学的思考でもいまだ重要な位置をしめていた²²。従ってフェッラーリがここで述べている占星術的園芸理論は、当時の植物学や占星術をめぐる議論を、園芸術に適用したものとも考えられる。

3.2. 天空の写しとしての幾何学花壇

フェッラーリが庭園を天空の写しとみなし、また占星術をかなり本格的なかたちで園芸術に取り込んだことを上に見た。これらをふまえ、今一度、彼が提示した幾何学花壇デザインを分析してみよう。

まず、花壇形態の基本モチーフは、正方形 (第一図面: 図1)、円 (第三図面: 図2)、八角形 (第四図面: 図3) といった基本的な幾何図形の組み合わせである。西欧では古代ギリシャ以来伝統的に、これらの図形には象徴性が読み込まれてきた。すなわち、円は天を象徴し、四角は大地、そして八角形は天と大地を結ぶ媒介とされた。特に第三図面はフェッラーリ自身が円形を天空の穹窿との類比で語っているし、また四角形に内接する円という図形は、天と地の咬合・照応を表象するものとして古くから用いられてきたものだ²³。

また、フェッラーリは8という数字に重点を置いていたが、確かに図形中には、八角もしくは8を基本とする幾何学形象が読み取れる。また第一図面の中央に見られる星型の花壇も、八条の光芒を放っている。8という数字は、伝統的に天界と結び付けられてきたものだ。中世までの天文学体系では、第八番目の球が恒星天であった。八角形は天空の女王マリアを象徴するものとされ、マリアに捧げられた聖堂が八角形の集中式平面をとったことはよく知られている²⁴。

さらに占星術との関連では、ホロスコープの図形を、第一図面の幾何形状から透かして見ることも可能である (図5)。またケプラー (Johannes Kepler, 1571-1630) やガリレオをはじめとする当時の最新

図5. プラトンのホロスコープ

図6. パドヴァ植物園の平面図

天文学もまた、幾何学的宇宙モデルを提出していた。同じく幾何学の持つ空間秩序構成力をその直接の造形原理とする庭園空間の内に、天空・宇宙のモデルが反映していたとしても、おかしくはない²⁵。

以上を勘案するなら、フェッラーリの幾何学花壇は、彼が『フローラ』の中で叙述する地上の植物世界と天空の星辰世界との照応関係を、花壇という具体的な物理空間の上にも反映させたものと考えられよう。ここから逆に、同時代の植物園に見られる同様の幾何学花壇の構成にも、こうした占星術的な天地の照応思想が反映している可能性を探ることも可能だろう。たとえば、1545年建設のパドヴァ植物園 (図6) の花壇デザインは、やはり星型、四角形に内接する円、および八を基本とする幾何学図形をまわっており、ここに当時のコスモロジーの反映を見ることができる²⁶。また1600年建設のマントヴァ植物園 (図7) は、占星術に造形の深かった Z. ボッキ (Zenobio Bocchi) が設計し、その形状は、まさにホロスコープそのものだ²⁷。おそらく植物園においては、異気候・異産地から集まる無数の植物の異質性を、天空の調和を反映した幾何学形状の花壇で栽培することによって、馴致する意図が働いたのではないだろうか。

4. 『フローラ』の幾何学花壇と理想都市の系譜

4.1. 花の共和国

『フローラ』中には、庭園を都市に類比させている箇所が多数ある。もし庭園を都市とみなすなら、庭園デザインのうちに、伝統的な都市デザインの系譜を読み取ることができはしないだろうか。まずは『フローラ』中の、庭園＝都市の類比箇所を挙げてみよう。

フェッラーリは庭園の造成法を述べる段で、「庭園とは花々の都市のごとく」*Il Giardino, che, quasi Città di fiori* であり、「花の部隊が駐屯する宿营地」*militare alloggiamento delle fiorite schiere* でもあるから、古代都市の建設手法に従って防衛されねばならぬ、とし、花壇を囲う生垣や柵の形成法を解説している (p. 17)。また苗床を論じる箇所では、苗木とは「庭園の幼き市民」*i pargoletti Cittadini degli Horti* であるとし、「花の共和国」*Repubblica de' fiori* のために良き特質を子供らに与え、また墮落種や雑種は取り除かねばならぬ、とプラトンの『国家』*La Repubblica* を思わせる議論を展開する (p. 43)。さらに庭園管理の段では、番犬のいない庭園は守備隊のいない都市や要塞のようなものだ、としているほか (p. 44)、庭師を兵士に喩え、平和の武具すなわち園芸器具を持って、花の共和国を防衛しなくてはならない、とも述べている。そして花々の具体的な栽培法を述べた箇所でも、再び花を庭園の市民に喩え、品種によっては敵対や反目の関係にあるものも存在するから、これに注意して植えなくてはならない、としている (p. 216)。その他、前節で詳しく分析した「庭園＝天空の都市」の類比も、ここに加えることができるだろう。

以上に挙げた例が示すように、フェッラーリは庭園を、はっきりと古代都市との類比で語っていることがわかる。都市と軍隊宿营地との関連や、共和国という言葉を多用していることから、彼が念頭においていたのは古代ローマの都市建設であろう。当然、ウィトルウィウス『建築論』に端を発する新都市設計理論、あるいは理想都市論との関連が想像されるが、『フローラ』中では建築書への言及は一切ない。以下に、『フローラ』中の造園理論ならびに花壇デザインの造形を、都市理論との関連で今一度分析してみることにしよう。

4.2. フェッラーリの庭園デザインと都市設計理論

第一書・第三章「庭園の建築」の冒頭部において、庭園の敷地条件が語られる (pp. 14-15)。いわく、気候が温和で、健康に良い土地であり、沼地から遠いことが望ましい。また河の真向かいも避ける。

「湿った冷たい空気」l'aure acquose が花の育成に適さないからだという。ここでは、プリニウス『博物誌』第18巻第6章への参照指示がある。敷地は十分な広さを確保して花々の過密を避け、方位は南面させて「湿った暖かい微風」i humidis et tiepidis venticelli を受けるようにする。この南からの暖風は、植物を賦活させる力のある、「植物のアニマ (生氣)」anime de' fiori であるという。

また敷地内部の花壇分割に際しては、極度に装飾的なデザインを避け、実用を優先させる (p. 20)。園路は中央で直行する大園路のほか、植物管理のために庭師が使う小園路も設ける。小園路の幅は 2 palmi (≒50cm) 以上とし、大園路は歩行用としてばかりでなく、鉢植え植物もここに整序配列させるようにする (p. 21)。

さらに堆肥を論じる箇所では、地味に富む土壌を、色や香りや触感などから識別する方法が、キケロやプリニウスを参照しつつ論じられる (pp. 76-77)。

さて以上に見た庭園の造成法のうち、敷地の選定にともなう気候条件その他への配慮は、まさにウィトルウィウスが『建築論』第一書で述べた、都市の敷地条件を彷彿とさせるものである²⁸。同書では、健康に良い土地であること、沼沢地の近隣はさけること、などが規定されていた。人間身体に有害なものは、当然植物にも有害であろうから、都市と庭園の敷地条件が類似するのは自然であろう。また庭園の周囲を囲う生垣は城壁とも通底するものであるし、中央で直行する園路は、古代ローマ都市において主要な幹線道路として機能していた、南北・東西の直行道路を想起させる。

さらに、風が植物に与える影響に多大な関心を払っている点は、注目し値する。風の影響は、やはりウィトルウィウスの都市設計論においても重要な要素である。八方向から吹く風や天空域の方位を考慮し、宇宙構造の理法に合致するかたちで、街路の割付や都市の方位、家の配置などを決定するというものだ (図8)²⁹。ウィトルウィウスに何らかのかたちで示唆をうけたルネサンス期の建築論においては、八角形ないしは数字8を造形の基本モチーフとする放射幾何学形状の理想都市モデルが、さまざまに提示された。フィラレーテによる理想都市スフォルツィンダや、ヴァザーリ (若) による理想都市計画などが、この種のデザインとしては有名である。これらの都市形状に、ウィトルウィウスによって示唆された、天空やあるいはコスモス (世界) と都市との照応というテーマが、なんらかの形で反映していたことは、すでに指摘されている³⁰。八角形はまた、

フェッラーリの花壇デザインにおいても、重要な造形モチーフであることは先述した通りだ。さらに八角形にかぎらず、フェッラーリが花壇デザインで採用している正方形および円形は、やはり理想都市デザインにおいても頻繁に用いられる形状であった。

以上を勘案するなら、フェッラーリの幾何学花壇デザインは、古代の都市設計理論をモデルとするものであり、都市デザインに伝統的に編み込まれてきた天地の咬合や、マクロコスモスとミクロコスモスの照応、といった象徴性を様々に織り込んだもの解釈できる。そしてこの象徴性に、植物と天界との間に伝統的に想定されてきた強固な関連性を反映させ、あるいは占星術的な象徴性を新たに加えることによって、自身の幾何学花壇を、「天空の甘美が、おぼろげに影を落とした、粗野なイメージ」、すなわち天空を地上に写し取った空間へと、仕立て上げたのだ。

結. 初期近代イタリアの幾何学庭園の造形原理

フェッラーリの属していたローマの芸術文化はバロックの世界であったが、一般にルネサンス期以降の庭園は、建築の問題として扱われるようになり、建築を規定する幾何学的調和や数比が、同じく庭園空間にまで適用されたといわれている³¹。建築論の分野で、はじめて幾何学花壇のデザインを取り上げたのはセルリオ (Sebastiano Serlio, 1475-1557) であったが³²、当時の装飾庭園や植物園の空間を飾っていた精緻な幾何学花壇の造形原理に関しては、まだ解明されていない点が多い。したがって、本稿がフェッラーリの花壇デザインについて分析した「天空との照応」や「都市デザインの系譜」から、当時の庭園デザインを規定していた造形原理を探る試みが、今後もっと行われる必要があるだろう。

本稿では立ち入った分析ができなかったが、フェッラーリは花壇で栽培する品種の名称を記憶するために、花壇に数字や記号をふり、また検索用の小冊子を作成する指示をしている (pp. 213-214)。これは明らかに記憶術的な検索システムと考えられ、記憶術が当時の庭園空間の構成に与えていた影響を探る上で、興味深い³³。その詳しい分析は、今後の課題として別稿にゆずることにしたい。

庭園の花壇は、そのファサードともいえる面を、天に向けている。またそこに植えられる植物も、基本的には、天空を目指して上昇する垂直的なベクトルをもっている。そう考えるなら、庭園花壇と天空との照応は、なかば必然的なものであったとはいえないだろうか。フェッラーリは、占星術的な園芸理論を解説したのち、その理論を読者に印象付けるため、自身が創作した寓話を挿入している。その寓話の中で女神フローラは、風の神にともなわれて天界におもむき、天の川を御車にのって駆ける月の女神に会って、天空の星々が植物に及ぼす影響の秘密を聞き知る (pp. 229-232)。このように、科学的思考と寓意・神話的思考、あるいは科学的知識と美や娯楽が渾然と入り混じった当時の思考形態をよくおさえたうえで、当時の芸術=科学文化を見るならば、豊かな歴史研究の成果を得ることが出来るだろう。そのような複合的な知的形態を端的に代表するものとして、フェッラーリの『フローラ』および同書中の幾何学花壇デザインをとらえることができるのだ。

<謝辞>

本稿の執筆にあたってはピサ大学美術史学科教授 Lucia Tongiorgi Tomasi 氏からご指導を受けた。またリエージュ大学客員研究員平井

図7. マントヴァ植物園の平面図

図8. ウィトルウィウス風向図解

浩氏には、筆者の研究テーマに対して常にご助言を頂いている。ここに記して各位に謝意を表したい。

註

¹ 庭園史研究の整理は：Strong, Roy., *The Renaissance Garden in England*, London, 1998 (1st 1979), pp. 11-13. また庭園史研究の本格的な展開を示すものとして庭園史紀要 (Journal of Garden History, 1981-) の発刊があげられる。

² Lazzaro, Claudia., *The Italian Renaissance Garden: From the Convention of Planning, Design, and Ornament to the Grand Gardens of Sixteenth-Century Central Italy*, New Haven, 1990; Mosser, Monique and Teyssot, Georges (eds.), *The History of Garden Design: The Western Tradition from the Renaissance to the Present Day*, London, 1991; Hunt, John D. (ed.), *The Italian Garden: Art, Design and Culture*, Cambridge, 1996; Benes, Mirka & Harris, Dianne S. (eds.), *Villas and Gardens in Early Modern Italy and France*, Cambridge, 2001.

³ Battisti, Eugenio., “Natura artificiosa” to “Natura artificialis”, in *The Italian Garden*, Coffin, D. R. (ed.), Washington, 1972, pp. 5-6. 庭園のアイデアをさぐる研究の方法論としては：Comito, Terry., *The Idea of the Garden in the Renaissance*, New Brunswick, 1978; Strong, Roy., *op. cit.*, p. 10.

⁴ Giovan Battista Ferrari, *Flora overo cultura di fiori*, Roma, 1638.

⁵ ルネサンス期の建築論における庭園デザイン論では、幾何学的なプロポーションが推奨されるものの、幾何学形状の具体的な意味の解説はない。

⁶ リンチェイ・アカデミーに関する古典的研究としては G. Gabrieli が今世紀初頭に行った一連の研究があり、近年再刊されている：Gabrieli, Giuseppe, *Contributi alla storia della Accademia dei Lincei*, Roma 1989. また Gabrieli 以降の代表的研究のうち本稿が参照にしたものは以下：Olimi, Giuseppe, *L'inventario del mondo: Catalogazione della natura e luoghi del sapere nella prima età moderna*, Bologna, 1992, pp. 315-379.

⁷ 新発見の資料に基く最新のリンチェイ・アカデミー研究は：I Segreti di un Collezionista. Le straordinarie raccolte di Cassiano dal Pozzo 1588-1657, catalogo della mostra a cura di F. Solinas, Roma 2000; Freedberg, David., *The Eye of the Lynx: Galileo, His Friends, and the Beginnings of Modern Natural History*, Chicago, 2002; Baldriga, Irene, *L'Occhio della Lince: I primi Lincei tra arte, scienza e collezionismo (1603-1630)*, Roma, 2002.

⁸ フェッラーリに関する基本的研究は：Tagliolini, Alessandro., *Storia del giardino italiano*, Firenze, pp. 234-236; Freedberg, David., “From Hebrew and gardens to Oranges and Lemons: Giovanni Battista Ferrari and Cassiano dal Pozzo”, in *Cassiano dal Pozzo: Atti del Seminario Internazionale di Studi*, Solinas, Francesco. (ed.), Roma, 1989, pp. 36-72; Tomasi Tongiorgi, Lucia., *An Oak Spring Flora: Flower Illustration from the Fifteenth Century to the Present Time*, Upperville Virginia, 1997, pp. 116-121. なお『フローラ』のイタリア語版は復刻されている：Giovan Battista Ferrari, *Flora overo culutura di fiori, riproduzione in facsimile a cura e con introduzione di Lucia Tongiorgi Tomasi*, Firenze, 2001.

⁹ Ibid., p. 440.

¹⁰ リンチェイ・アカデミーの知的位置づけに関しては：Garin, Eugenio., “Fra '500 e '600: scienze nuove, metodi nuovi, nuove accademie.”, in *Convegno celebrativo del IV centenario della Nascita di Federico Cesi*, Roma 1986, pp. 29-49; Findlen, Paula., *Possessing Nature: Museums, Collecting, and Scientific Culture in Early Modern Italy*, Berkeley, 1994, pp. 70-78. リンチェイ・アカデミーで用いられていた略号については Alessandrini, Ada., “Originalità dell'Accademia dei Lincei.”, in *Convegno celebrativo del IV centenario della Nascita di Federico Cesi*, Roma 1986, pp. 77-177. 特に p. 107; Eamon, William., *Science and the Secrets of Nature: Books of Secrets in Medieval and Early Moddern Culture*, New Jersey, 1994, pp. 229-233.

¹¹ リンチェイ・アカデミーにおける植物研究については：Pignatti, Sandro e Mazzolani, Gaspare., “Federico Cesi botanico.”, in *Convegno celebrativo del IV centenario della Nascita di Federico Cesi*, Roma 1986, pp. 213-223; Findlen, Paula., *op. cit.*, pp. 73-76. アカデミー会則『リンチェオグラフィ』に関しては：Alessandrini, Ada., *op. cit.*, pp. 89-99; Olmi, Giuseppe., *op. cit.*, pp. 356-365.

¹² 表徴理論または「徴」の理論ともいわれる。事物の外見の特長から類推的思考を展開し、ことなる事物間に照応や関連性を認める理論。フーコー『言葉と物』の議論が著名であるが、この論著は歴史研究ではないため、実証性には欠ける。同理論の基本的文献としては：Bianchi, Massimo Luigi., *Signatura rerum: segni, magia e conoscenza da Paracelso a Leibniz*, Roma, 1987.

¹³ フェッラーリ研究は、近年ようやく彼の著作の収録図版や植物分類に関する美術・科学史的側面に注目が集まるようになったが、庭園史では、まだ本格研究が行われていない。庭園史的観点からの先駆的研究は：Belli Barsali, I., “Una fonte per i giardini nel Seicento: il trattato di Giovan Battista Ferrari”, in *Il giardino storico Italiano. Problemi di indagine, fonti letterarie e storiche*, Ragionieri, Giovanna (ed.), Firenze, 1981, pp. 221-234; Galletti, Giorgio., “Se amerei di gareggiare con la vaghissima ritondità del cielo...” , il giardino a pianta centrale fra manierismo e barocco.” in *Il giardino delle muse*, Tagliolini, Alessandro et al. (eds.), Firenze, 1995, pp. 39-60.

¹⁴ 『フローラ』中の自然魔術的側面の分析に関しては：Segre, Ada., “Le metamorfosi e il giardino italiano nel seicento”, in Tagliolini, Alessandro et al. (eds.), *op. cit.*, pp. 97-126. バロック期の驚異鍾愛美学に関しては：Kenseth, Joy., *The Age of the Marverous*, New Hamshire, 1991.

¹⁵ Ibid. (訳文中のカッコは訳者の補遺) , ...questi nostri Elisij senza fiori ancora fioriscano, ed habbiano le loro stelle, che la bellissima progenie de' fiori producono con evidenza maggiore, che i remotissimi lumi celestiali co' loro influssi non fanno.

¹⁶ Chi avrà a grado, nel ristretto di terrestre Giardino di rappresentare quella Città celestiale, felice stanza di eterna stabilità, ...e nel dimorare in terra, di assuefarsi in un certo modo al Cielo, habbiassi il modello, che a' Giardini quadrati esattamente quadrata...

¹⁷ Se, facendo elezione, per vaghezza dell'Horto, di una sembianza ritonda, amerei di gareggiare con la vaghissima ritondità del Cielo, ò di fabricare al secolo de' fiori quasi un nuovo mondo; considera il terzo sbozzo,...

¹⁸ ウェルトゥムヌスは、果実の女神ボモーナと共に、植物の変容や季節変化を司る。Cf. Impelluso, Lucia., *Dizionari dell'arte: Eroi e Dei dell'antichità*, Milano, 2002. また同神はオウィディウス『変身物語』第十四巻でも語られている。

¹⁹ プリニウス『博物誌』第18巻24章。

²⁰ Chi tien quel conto del piantar d'un fioretto, che suol tenersi della natività di qualche Principe, e stima doversi rinvenire più esattamente l'horoscopo, overo ascendente, che sia felicissimo, (Ferrari, *Flora*, p. 227.)

²¹ 植物学と星辰の影響および植物学と表徴理論の関係に関しては：A. アーバー、『近代植物学の起源』、八坂書房、1990年（「第八章 象徴の教説と占星術的植物学」、185-199頁）；MacDougall, Elisabeth Blair., “A Paradise of Plants: Exotica, Rarities and Botanical Fantasies.”, in Kenseth, Joy., *op. cit.*, pp. 145-158; Lamarche-Vadel, Gaetane., *Jardin secrets de la Renaissance: De astres, des simples et des prodiges*, Paris, 1997, pp.126-134. 初期近代植物学史の基本的研究は：Atran, Scotto., *Cognitive Foundation of Natural History: Towards an Anthropology of Science*, New York, 1990; Reeds, Karen Meier., *Botany in Medieval and Renaissance Universities*, New York & London, 1991; Findlen, Paula., *op. cit.*, chap.6, “Museums of Medicine”, pp. 241-287.

²² 初期近代の占星術に関する科学史的研究は多数あるが、本稿では主に以下を参照した：S. J. テスター『西洋占星術の歴史』（恒星社厚生閣、1997年）；Grafton, Anthony., *Cardano's Cosmos: The Worlds and Works of a Renaissance Astrologer*, Cambridge (Mass.), 1999. リンチェイ・アカデミー結成時のホロスコープ作成および同アカデミーと占星術の関連は：Federico Cesi e la fondazione dell'Accademia dei Lincei, catalogo della mostra, Napoli 1988, pp. 44-49, 53-55.

²³ Cf. Manetti, Renzo., *Le porte celesti: segreti dell'architettura sacra*, Firenze, 2001, pp. 25-29, 42-53.

²⁴ Wittkower, Rudolf., *Architectural Principles in the Age of Humanism*, New York, 1971 (1st 1949), p. 31; Manetti, Renzo., *op. cit.*, p. 29.

²⁵ Cf. Hallyn, Fermand., *The Poetic Structure of the World: Copernicus and Kepler*, New York, 1993. なお R. ストロングはプトレマイオスの宇宙体系をそのまま花壇デザインに適用した事例(イングランド)を紹介している：Strong, Roy., *op. cit.*, pp. 120-122.

²⁶ バドヴァ植物園の幾何学モデル、シェーマについての分析は次を参照：Azzi Visentini, Margherita., *L'Orto botanico di Padova e il giardino del Rinascimento*, Milano, 1984, pp.69-102. 植物園における天界・星辰の影響については、次の研究が先駆的に示唆をしている：Tongiorgi Tomasi, Lucia., “Projecrs for Botanical and Other Gardens: A 16th - Century Manual.”, *Journal of Garden History*, vol 3 no. 1, pp. 1-34, 1983.

²⁷ マントヴァ植物園に関しては拙論参照：「16世紀イタリアの植物園に見られる象徴性と審美性について：アゴスティーノ・デル・リッチョ（1541-98）の理想庭園構想に関する研究」『日本建築学会計画系論文集』2000年11月号、283-288頁。

²⁸ 『ウィトルウィウス建築書』（森田慶一訳註）第一書第四章。

²⁹ 前掲書、第一書第六章、第六書第一章。

³⁰ 都市形態が持つ幾何学形状の象徴性ならびにその機能についての分析は以下を参照：Marconi, Paolo (ed.), *La città come forma simbolica: studi sulla teoria dell'architettura nel rinascimento*, Roma, 1973; Fara, Amelio., *La città di Guerra*, Torino, 1993. ルネサンス期の理想都市論は：Sciolla, Gianni Carlo., *La città ideale nel Rinascimento*, Torino, 1975.

³¹ Tagliolini, Alessandro., *op. cit.*, pp. 60-63.

³² Serlio, Sebastiano., *I sette libri dell'architettura*, Venezia, 1584, Libri IV, pp. 197-198.

³³ 初期近代の庭園と記憶術の関連に関しては拙論参照：「ロクス・アモエナス（心地よき場）としてのルネサンス庭園と場所記憶術：アゴスティーノ・デル・リッチョ（1541-98）の理想庭園計画にみられる記憶術的空間構成と百科全書的知の表象」『日本建築学会計画系論文集』2003年7月号、239-244頁。

<図版出典>

図5：M. Ficino, *De vita Platonis*, in Opera, I. 2, p. 763

図6：A. Minelli, *L'Orto botanico di Padova, Venezia*, 1995, p. 32.

図7：L. Tongiorgi Tomasi, *op. cit.*, p.14.

図8：P. Marconi, *op. cit.*, fig. 105.

(2003年7月8日原稿受理, 2003年11月25日採用決定)